

マタイによる福音書6章25-34節 「信仰者と生活の心配」

1A もっと大事な命と体 25

2A もっと価値のある弟子たち 26-30

1B 養われる空の鳥 26-27

2B 着飾っている野の花 28-30

3A 異邦人の求めるもの 31-32

4A 第一に求める神の国と義 33-34

本文

私たちの山上の垂訓の学びは、マタイ6章25節以降に入ります。6章は、前半は、ユダヤ人たちが神に献身する時に起こる問題、偽善について見ていきました。慈善をする、祈る、断食をするというのは、ユダヤ人の神への献身行為の基本ですが、その中でさえ人に見せるために行っているという、自分が良く思われたいという動機で行なっているという問題をイエス様は取り上げられました。キリスト者として、私たちが天におられる父に対して、仕えているということをはっきりさせるべきことでした。

そして前回から、19節以降で、世における生活、富との関わりについて見ていきました。ですから、神に仕えるという、神に向かった内容から、この世の経済活動との関わりを見はじめています。信仰者は、決して世捨て人のように生きません。他の人々と同じように働き、社会に関わり、仕事をして収入を得ます。けれども、神を信じる者として、富の捉え方が変わります。まことの富は天にあるという真理を私たちは持っています。天にあるものこそ、朽ちることなく、永続するものです。ゆえに地上にある富は、神のために用い、富をもって神に仕えるというのが、キリスト者としての生き方です。ですから、教会に来たら神に仕えて、教会外のところでは収入を得て、世の生活をする、というものではなく、生活のすべてが神のものであり、教会の外でも、その経済活動において主に仕える、ということになります。富というのは、偶像にもなって、当時、マモンと呼ばれていましたが、それだけ力を持っていて、私たちの目を曇らせます。ゆえに、必ず神に仕えるのだという、絶え間ない決断が必要です。富ではなく、神に仕えるとしっかりと決めることによって、初めて富から自由にされ、けれども、富を神のために用いることができます。

こうやって、キリスト者が富に対してどのような姿勢で臨むべきかを見てきましたが、主は次に、「思い」において、私たちがしっかりと注意すべきことについてイエス様は教えられます。その教えは、「心配してはならない」であります。今日のイエス様の教えは、現代社会にとっても大きな問題となっていて、信仰者としても大きな戦いの分野になっています。社会そのものが、心配するように私たちに仕向けてきます。私たちは、いつも、これこれをしなければいけないという責任感で動い

ています。それは良いことなのですが、問題は優先順位が付けられていないことです。すべてのことを平等に行っていこうとして、思いが乱れるのです。それを「思い煩い」と呼び、神を父と呼ぶ関係を持っている私たちには、ふさわしくないことなのです。それぞれしなければいけないことは、罪でもなく、悪いことでもないのです、厄介なのです。自分は良いことをしていると思い込んで、実は、イエス様の叱責を受けなければいけないほど、バランスを崩した生活を送ってしまうのです。イエス様の言葉から、心配することの問題に取り組んでいきたいと思います。

1A もっと大事な命と体 25

25 ですから、わたしはあなたがたに言います。何を食べようか何を飲もうかと、自分のいのちのことで心配したり、何を着ようかと、自分のからだのことで心配したりするのはやめなさい。いのちは食べ物以上のもの、からだは着る物以上のものではありませんか。

イエス様は、強く「あなたがたに言います」「やめなさい」と叱責しておられますね。強く戒められないと、心配している者たちは、なかなか、気づきにくいものです。心配している者たちに、ブレーキをかけている言葉です。

ここで主が取り扱っておられることは、二つのことです。一つは、「自分のいのちのこと」です。もう一つは、「自分のからだのこと」です。いのちを保つために、しなければいけないのが、「食べること、飲むこと」ですね。そして、身体のためにしなければいけないのが、「着る」ことです。

ここで、生きるために、食べること飲むことを考えるな、と禁じているわけではありません。また、身体を温めるために、着ることを考えるな、と禁じているのでもありません。これらのことは、しなければいけないことです。これらのことは、むしろしなければいけないことです。パウロが、テサロニケにいるキリスト者たちに対して、一部が、働きもせずにお節介ばかりしている者たちがいたので、このように厳しく戒めています。「Ⅱテサ 3:8-10 人からただでもらったパンを食べることもしませんでした。むしろ、あなたがたのだれにも負担をかけないように、夜昼、労し苦しみながら働きました。私たちに権利がなかったからではなく、あなたがたが私たちを見習うように、身をもって模範を示すためでした。あなたがたのところにいたとき、働きたくない者は食べるな、と私たちは命じました。」心配するなということは、何も考えるなということではなく、むしろ、主にあって労して働くことをパウロは、キリスト者生活として強く勧めていました。

では、何が問題なのか？そこで注目すべき言葉は、「以上」という言葉です。比較して、どちらが大事かを、はっきりさせているのです。いのちのために、食べ物を得ますが、食べ物と命は、もちろん命が大事です。からだのために着る物について考えますが、着る物と体を比べれば、もちろん体が大切です。その順番を間違えれば、本末転倒になりますね。ところが、心配というのは、これをさせてしまうのです。心配というのは、当たり前を考えられるはずの順番を狂わせます。ここ

の言葉は、元々「分ける、分離させる」というものです。私たちの心を、大切なものから逸らさせるという意味合いがあります。これが問題なのです。

有名な話としては、マルタとマリアのことがあります。ベタニアの彼女たちの家にイエスが来ました。マルタが迎えました。マリアは、主の足もとに座って、主のことばに聞き入っていました。「ところが、マルタはいろいろなもてなしのために心が落ち着かず、みもとに来て言った。」とあります。それで、マリアに手伝いをさせるようにイエス様に訴えたのですが、イエス様は、「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。」と言われました(ルカ 10:38-42)。もてなしが、悪いことではないのです。イエス様を敬うために、もてなしをしました。けれども、主の言葉を聞くということが、必要なことであり、それを忘れてしまったら、もてなしをしたところで元も子もありません。これが、心を乱すこと、思い煩うことであります。順番を間違ってしまうのです。

2A もっと価値のある弟子たち 26-30

結局、なぜそんな問題が起こってしまうのか？それは、自分の命は、神によって支えられていて、神から授かっていることを忘れているからです。そして、この身体も、神から授かっている、神の賜物であることを忘れているからです。神から授かったもので、自分の命は神が取ることもできれば、維持することもできます。体も同じです。あたかも、自分の力や努力で命を支え、身体を支えていると思っているところで、生活における思い煩いが出てくる原因になっています。「ヤコ4:14 あなたがたのいのちとは、どのようなものでしょうか。あなたがたは、しばらくの間現れて、それで消えてしまう霧です。」そうですね、私たちはどこまで自分の力で自分の命を支えていますか？健康管理はできるでしょう、けれども、自分で自分の命を支えることはできません。このような、あまりにも明白な事実を私たちは忘れてしまい、それで食べること飲むことで思い煩い、着ることで思い煩ってしまいます。そこで、イエス様は、すぐ目の前に見える自然に、弟子たちの目を向けさせます。

1B 養われる空の鳥 26-27

26 空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。それでも、あなたがたの天の父は養ってくださいます。あなたがたはその鳥よりも、ずっと価値があるではありませんか。

食べたり、飲んだりすることについて、いのちについて、イエス様はまず語られます。空の鳥の例を挙げておられます。おそらく、今、空に鳥が飛んでいるので、「見なさい」と言われていますね。まず、鳥は、「種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません」ということです。これは、すべて人間が食べるために行う作業です。種蒔きをして、育て、そして時が来たら刈り入れをします。それらのことをしなければ、食べていけないのは当たり前です。神は人が、労働して、食べていくように造られています。しかし、そのことで忘れてはいけないのは、働いても、人の命はな

くなる時はなくなるのです。人の命は神にかかっているのです。それに気づきません。そこでイエス様は、そのような作業をしていない鳥が、今、現にここで生きていて、空を飛んでいるのではありませんか？と問われているのです。

そのことをイエス様は、「あなたがたの天の父は養ってくださいます」と言われています。イエス様は、ご自身が甦られ、そこで、「わたしの父、あなたがたの父であるかた、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る」と言われました(ヨハネ 20:17)。三位一体の神にある、父と子の関係を、イエス様はご自身が彼らにとって兄弟になられることによって、弟子たちにとっても父となったのです。神の養子縁組になり、神の子供になったのです。「ロマ 8:14-15 神の御霊に導かれる人はみな、神の子どもです。あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父」と叫びます。」天と地を造られた神ご自身が、私たちをキリストにあって子としてくださり、父として養ってくださっているのです。

それで、ここでイエス様は対比をしています。空の鳥という、そこにいるありふれた生き物でさえ、すべての生き物を造られた神は養っておられるのだから、ご自分のかたちに造り、かつキリストにあってご自分の子とした弟子たちを、養わないはずがないではないか？ということです。そうですね、自然を見ると、何も手を加えていないのに、きちんと秩序をもって保たれている姿を見ます。空の鳥は落ちてくることはありません。きちんと生きています。私たちはいつも、思い出すべきですね。「私のこと、あなたは分かっているからそんなこと言えるんですね。これまで苦勞して働いてきたから、何とか生き延びたのですよ。」と言われても、いいえ、神の憐れみがなければ、お金が有り余っている人でさえ、今日、死ぬかもしれないし、事実、死んでいる人もいます。お金がなかったのに、それでも生き延びている自分がいるのは、天の父が養ってこられたからです。

27 あなたがたのうちだれが、心配したからといって、少しでも自分のいのちを延ばすことができるでしょうか。

本当に、これほど明白なことであっても、私たちはそれでも心配します。心配するというのは、言い換えると、自分で何でもできるという高慢なのです。使徒ヨハネは、こういいました。「 Iヨハ 2:15-16 あなたは世も世にあるものも、愛してはいけません。もしだれかが世を愛しているなら、その人のうちに御父の愛はありません。すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。」ここで言っている「暮らし向きの自慢」というのが、その高慢のことです。自分で生活をするのだとする、神によって支えられている命を、あたかも自分が支えているかのようにみなしているのを、プライドと呼び、それが心配の原因になっています。

2B 着飾っている野の花 28-30

28 なぜ着る物のことで心配するのですか。野の花がどうして育つのか、よく考えなさい。働きもせず、紡ぎもしません。29 しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも装っていませんでした。30 今日あっても明日は炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこのように装ってくださるのなら、あなたがたには、もっと良くして下さらないでしょうか。信仰の薄い人たちよ。

イエス様は、着る物についての心配を取り上げておられます。ここで注意したいのは、当時、着る物は私たちが考える以上に、希少なものでした。覚えていますか、イエス様が十字架に付けられていた時に、その身に着けていた衣を、兵士たちがくじで分けましたね。売ることができるからです。また、バプテスマのヨハネが、悔い改めを説いた時に、「ルカ 3:11 下着を二枚持っている人は、持っていない人に分けてあげなさい。」と言いました。ですから、ずいぶんと着る物が少なかったことが予想できます。けれども、イエス様は心配してはいけないと言われるのです。

ここでイエス様は、「よく考えなさい」と言われます。心配している時、よく考えるのをやめてしまっています。心配とは、先ほど話したように、分かれてしまうという意味で、他のことを考えてしまって、よく考える能力がそがれてしまっています。よく考えれば、野の花は、着る物を作るように、働きもせず、紡ぎもしないのに、あれだけきれいです、美しいです。そしてイエス様は、ソロモンの栄華を思い起こさせています。ユダヤ人の弟子たちであれば、ダビデの息子ソロモンが、息をのむばかりの栄華を持っていたことを知っています。しかしよく考えると、野の花というものは、どんなに天才的なデザイナーがこしらえた衣装よりも、もっと美しい装いをしているのです。星野富弘美術館に行った時のことを思い出します。彼は体が不自由になりましたが、こうした心配からは自由にされました。なぜなら、花の美しさをよく考えることができるようになり、そこにある小宇宙と言ったらよいでしょうか、あまりものデザインに圧倒されているのが、その絵画からよく伝わってきます。

そして、イエス様は比べておられるのです。その美しく装った野の花は、それでもすぐに明日は炉に投げ入れられてしまうほど価値のないものです。神がお造りになられた花ですが、すぐにしぼみ、その草は抜き取られ、炉に投げ入れられます。ましてや、神の子供とさせられたあなたがたが、からだのことについてよくして下さらないわけがないでしょう、と仰っているのです。

そして、「信仰の薄い人たちよ」と言われます。信仰がないと言われていません、薄いと言われていきます。これは、どういうことでしょうか？しばしば、信仰は盲目にさせると言います。いいえ、信仰というのは、むしろよく考えないと持てないものです。それは、よく考えれば、神の造られた生き物や植物に、神が養い、また着飾っておられることが分かるはずです。そして、よく考えれば、自分は、そうした神の被造物よりも、神のかたちとして造られ、もっと価値のあることを知っているはずです。「詩 8:5-6 あなたは人を御使いよりわずかに欠けがあるものとしこれに栄光と誉れの冠をか

ぶらせてくださいました。あなたの御手のわざを人に治めさせ万物を彼の足の下に置かれました。」万物を治めるように、神は人に命じておられます。ましてや、父と呼ぶことのできる御霊を、キリストを信じる者には与えておられます。信仰とは、よく考えることなのです。

私たちの信仰の成長は、今の自分と将来の希望のはざまで、いかに信仰を十分に働かせるかにかかっています。自分がキリストを信じたことによって、救われたことを知ります。そして、後に神の国が到来して、そこに入り、豊かにされることも信じています。しかし今、この地上で生きている時に、そのような神の子としての恵みが与えられていることを信じるのは、まだ目で見える形ではそうになっていないので、信仰を働かせる必要があるのです。目に見えないけれども、それでも、事実、自分は神の国に召されたのだから、王の子どもとして生きることを決めるのです。

3A 異邦人の求めるもの 31-32

31 ですから、何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと言って、心配しなくてよいのです。32 これらのものはすべて、異邦人が切に求めているものです。あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。

イエス様は、心配するのは異邦人がしていることだと言われています。対照的に、あなたがたは天に父がおられるのだから、あなた方の必要を全て知っていると言われています。6章の前半においても、イエス様は祈りについて、異邦人のように祈ってはならないと言われました。「6:7-8 また、祈るとき、異邦人のように、同じことばをただ繰り返してはいけません。彼らは、ことば数が多いことで聞かれると思っているのです。ですから、彼らと同じようにしてはいけません。あなたがたの父は、あなたがたが求める前から、あなたがたに必要なものを知っておられるのです。」ここでイエス様が語られている異邦人とは、単に非ユダヤ人というだけでなく、異教徒ということ。まことの神を知らない人々ということであり、偶像を拝んでいる人々のことです。

偶像を拝んでいると、どういうことになるのでしょうか？それは、自分たちが支えなければいけない神々になります。イザヤ書には、バビロンが滅んで、その都から逃げる人々のことをこのように風刺しています。「46:1-2 ベルはひざまずき、ネボはかがむ。彼らの像は獣と家畜に載せられる。あなたがたの荷物は、疲れた動物の重荷となって運ばれる。彼らはともにかがみ、ひざまずく。重荷を解くこともできず、自分自身も捕らわれの身となって行く。」分かりますか、自分たちで運んでいかなければいけない神々だったのです。それとは対照的に、イスラエルの神は彼らを運んでおられました。「46:3-4 ヤコブの家よ、わたしに聞け。イスラエルの家のすべての残りの者よ。胎内にいたときから担がれ、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたが白髪になっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。わたしは運ぶ。背負って救い出す。」これが、異邦人、まことの神を知らない人々の特徴です。祈りにおいては、一生懸命、自分の必要と窮状を伝えなければ、分かってくれない耳の鈍い神なのです。とこ

ろが、私たちの父は、私たちが心を開く前から、その必要を知っておられます。祈りは、ただ願いを聞いてもらうのではなく、その愛してやまない父の恵みを受ける時なのです。

それで、心配することも、異教徒の特徴であり、偶像礼拝と同じなのです。つまり、自分で何とかしなければ祝福されないのですから。自分であたふたと動かなければ、神々は自分に罰を与えるのですから。日本はそういう意味で、異教徒であり、偶像礼拝をしています。自分たちで何とかできると思っているし、事実、何とかしています。自分たちではどうにもできないというところまで至っている人たちが少ないです。ですから、神といっても、アクセサリ程度にしかありません。自分で生きて、後、何か保険のために信じておこうということになります。クリスチャンとて、キリストを信じるのは日曜日で、月から土は、自分で生きるとしてしまいます。神を求めるといふ切実さが抜けるのです。ですから、イエス様の弟子たちに対する叱咤は、私たちに対する叱咤でもあるのです。

4A 第一に求める神の国と義 33-34

33 まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。

この有名なイエス様の命令で、最も大切なものは何か分かりますか？「まず」であります。順番です、優先順位です。これをはっきりさせていないので、優先順位が崩れ、そして心配しなくてよいことで心配するようになります。ここがはっきりしていないので、例えば、他の信者と共に集まることも大事だが、仕事があるから、ということで、それを同じところに置いてしまいます。そうすれば、当然、周りは「何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようか」ということを気にしている異邦人の世界ですから、当然、仕事の方に流れるのです。イエス様が、四種類の土の喩えで、いばらの生えている土の落ちた種は、根がで茎が伸びても、茨によって、実を結ばなくなると言われた通りです。

愛するというのは、優先順位です。イエスの弟子になるというのは、イエスを第一にすることです。例えば父と母を敬うのですが、イエス様よりも愛するのであれば、弟子としてふさわしくありません。そこで、自分の都合を第一にする強い欲求が自分にあるので、それで、「自分を捨てて、自分の十字架を負う」また「自分のいのちを憎む」という強い言葉を、イエス様は使われたのです。

そして、約束があります。神の国と神の義を第一に求めたら、自分の必要は、「加えて与えられます。」ということです。多くの人が、勘違いをします。キリストの弟子になることは、世捨て人になり、貧しい人になり、そういった食べることを、着ることを求めてはいけないということですね、と思ってしまうのです。イエスだけいけば、すべてだから、他は要らないということなのですね、と勘違いします。いいえ、主は加えて与えてくださる方です。ソロモンのことを思い出してください、若くして王になりました。それで、彼は王として治めることのできる知恵を与えてくださいと祈りました。主は、他のことを願わず、そのことを願ったから、知恵を与えるし、それだけでなく、「I 列 3:13 願わなか

ったもの、富と誉れもあなたに与える。」加えて与えてくださるのです。

例えば、友達が欲しい、友達がいないとして悩んでいたら、イエス様を友として親しく交わるのです。そうすれば、自分にふさわしい友を、主が与えてくださいます。今、良い仕事が与えられたら、と願っても、主が命じられること、主に関することを第一としているなら、仕事も加えて与えられます。仕事がないから、神のことはまたあとで、となりますと必ず空回りします。しかし、仕事よりも主を優先するなら、必ずや主は加えて与えてくださるのです。

34 ですから、明日のことまで心配しなくてよいのです。明日のことは明日が心配します。苦労はその日その日に十分あります。

一日一日を、大事にするという姿勢です。先にイエス様が引用されたソロモンですが、彼は世にあるあらゆるものを求めて、それで結論が「空の空、すべてが空しい」と言った人であります。けれどもその彼も、ここでイエス様が言われていることと同じ意見を述べています。「伝 5:18 見よ。私が良いと見たこと、好ましいこととは、こうだ。神がその人に与えたいのちの日数の間、日の下で骨折るすべての労苦にあって、良き物を楽しみ、食べたり飲んだりすることだ。これが人の受ける分なのだ。」

世界を見回しますと、非常に興味深いことは、物があふれ、便利になった社会に心の病が始まるということです。なければ、今生きていることに感謝することが容易にできます。日々の糧は神からの贈り物であることを実感できます。空の鳥のように、自分も養われているのだということを実感できます。けれども、豊かで便利だから、心を思い煩い、それで心の力をすり減らすのです。これらは神からの賜物であり、感謝して受け取るべきものです。けれどもそれは同時に責任であります。絶えず選択していかなければいけません。まず、神の国と神の義を求めます。富に仕えることなく、富に頼ることなく、ただ天の父の養いの中に生きていくことを意識して選び取っていかねばいけません。